



Title	和歌山市出身若年層における否定辞使用の多様性とその要因
Author(s)	山口, 珠央
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2023, 19, p. 76-96
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/92434">https://doi.org/10.18910/92434</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 和歌山市出身若年層における否定辞使用の多様性とその要因

山口 珠央

### 【要旨】

和歌山市では「ン」「ヤン」「ヘン」「ナイ」という4種類の否定辞が使用されているが、「ヤン」が五段動詞に接続できないこと以外は明らかでない部分が多い。そこで本研究では和歌山市出身若年層における否定辞使用の実態を明らかにするとともにその否定辞使用に影響を与えている要因について検討した。否定辞使用実態については会話録音調査、影響を与えている要因についてはアンケート調査とインタビュー調査を行って話者の属性と意識の両面から考察した。結果として、和歌山市出身若年層全体としては五段動詞には「ン」を、五段動詞以外には「ヤン」を主に使用しながら複数の否定辞をバリエーションとして持っていることが明らかになった。さらに詳細に分析を行うと、否定辞使用には「和歌山市型」、「関西方言バリエーション型」、「標準語バリエーション型」、「マルチ型」の4つのタイプがあることが分かった。これらの否定辞使用タイプに影響を与えている要因としては生え抜き度や居住歴・生活圏といった属性からの影響が多く見られ、意識からの影響はわずかにとどまった。

【キーワード】 和歌山方言、否定辞、バリエーション、和歌山市出身若年層、方言使用実態

### 1. はじめに

和歌山市では「ン」「ヤン」「ヘン」「ナイ」という4種類の否定辞が使用されている。このうち「ヤン」は五段動詞に接続できないため、和歌山市出身若年層は五段動詞の否定形を作る際のバリエーションとして「ン」「ヘン」「ナイ」の3種類を、五段動詞以外の否定形を作る際のバリエーションとして「ヤン」を含めた4種類を持っていることになる。以下は五段動詞と五段動詞以外それぞれにおける各否定辞の使用例である（すべて筆者の作例）。

- (1) 用事があるから {イカン/\*イキヤン/イケヘン/イカナイ}。 【五段動詞】
- (2) ドラマはあんまり {ミン/ミヤン/メーヘン/ミナイ}。 【一段動詞】
- (3) 明日は学校に {コン/コヤン/コーヘン/コナイ}。 【力行変格活用動詞】
- (4) 宿題を {セン/シヤン/セーヘン/シナイ}。 【サ行変格活用動詞】

和歌山市出身若年層の会話に耳を傾けると「ン」「ヤン」を多く使用しているようであるが、中には「ヘン」や「ナイ」を多用する人々もいる。「ヘン」「ナイ」の使用者の話し方は和歌山方言らしくないと感じられるが、「ン」「ヤン」以外の否定辞を使用する背景には進学や就職に伴う行動圏の拡大や生活圏の変容がかかわっていきそうである。加えて、和歌山県外の土地に対する憧れなど、よその土地に対する志向性ともかかわるようである。本研究では、和歌山市若年層の否定辞使用の実態を明らかにするとともに、その使用実態に影響を与えている要因について、居住歴や生活圏といった話し手の属性にかかわることがらと、地域のことばや土地への志向性など、意識にかかわることがらの二つの観点から検討していく。

## 2. 先行研究と問題のありか

本節では先行研究と問題のありかを述べる。2.1では、本稿の調査対象地域となる和歌山市で使用されている否定辞について先行研究を挙げながら説明し、各否定辞と使用地域イメージとの結びつきについても整理する。そして2.2では、方言使用と話者の属性や意識の影響関係について論じた先行研究を整理する。これらを踏まえて問題のありかと本研究の目的を2.3で述べる。

### 2.1. 和歌山市で使用されている方言否定辞とその分布

近畿地方および四国地方における動詞否定形式の変化について論じた岸江(2014)では、近畿地方には豊富なバリエーションの否定辞が存在し、それらが中央から拡散されたり各地域に分布したりしていると述べている。松宮(1992)や日高(1994)によれば、和歌山市では「ン」「ヤン」「ヘン」の3つの否定辞が使用されているようである。以下、それぞれの否定辞の地理的分布について整理する。

まずは否定辞「ン」についてである。近畿地方における「ン」の使用について、日高(1994)は近畿周辺部に分布しているとしている。また65歳以上の人を対象に近畿地方の言語地図を作成した岸江他編(2017)でも、和歌山市を含む近畿周辺部を中心に「ン」の使用が示されている。このように「ン」は和歌山市を含む近畿周辺部に分布している。

続いて「ヤン」は、「ン」および後述の「ヘン」とは異なり、五段動詞に接続できないという特徴を持つが、楳垣(1932)では和歌山県全域や奈良県と三重県の一部地域で使用されていると述べられている。また松宮(1992)は和歌山県下の「ヤン」の分布について、和歌山市を中心とする和歌山県北部で使用されているとしている。

最後に「ヘン」の地理的分布について説明する。山本(1981)は「ヘン」を大阪方言および近畿方言に特徴的な表現としている。また日高(1994)では周辺に分布する「ン」とは相補的な分布をなすと述べ、大阪平野を中心とする近畿中央部で主に使用されるとしている。ただし日高(1994)や松宮(1992)、岸江他編(2017)を見ると「ヘン」の使用域は拡大しており、和歌山市は「ン」と「ヘン」が混ざり合う地域にあたる。また、鳥谷・岸江(2014)で示されていた「大阪のことば調査」の結果では、19~29歳の若年層はすべての動詞活用型の打消し表現において「ヘン」を最もよく使用していた。つまり「ヘン」は、近畿周辺部にもその使用域を拡大する一方で、現在でも近畿中央部との結びつきを持つといえる。

上述のとおり、和歌山市には3種類の方言否定辞が使用されているが、各否定辞の地理的分布にはそれぞれ違いがある。和歌山市においても、すべての否定辞を「自分の方言の否定辞」と捉えるのではなく、各否定辞の分布域と結びつけた把握のしかたがなされているように思われる。標準語否定辞の「ナイ」と併せてこれを整理すると表1のようになる。本研究の調査の中で、インフォーマントから「和歌山の人にはヤンヤン言いがちだと言われる」、「大阪府出身の友人が使う「ヘン」を聞いて珍しいと思った」という声が聞かれた。さらに「ナイ」を使用したところ都会的で気取っているという意味で変だと指摘されたことがあるという話もあった。近畿地方では土地により異なる否定辞が使用されており、それぞれが使用地域と結びついたイメージを持っていることが窺えるのである。

表1 和歌山市で使用される否定辞とその地理的イメージ

否定辞	近畿地方における地理的分布	イメージ
ン	紀伊半島や近畿北部	近畿周辺部らしさ
ヤン	和歌山市を中心とする和歌山県北部	和歌山市らしさ
ヘン	近畿中央部から次第に周辺部へ拡大	大阪府を中心とする近畿中央部らしさ
ナイ	—	東京都などの首都圏らしさ

和歌山市には、それぞれ異なったイメージを持つ4つの否定辞が存在する。しかしその使用については不明確な部分が多く、それぞれの否定辞がどのように使用されているかという実態については明らかになっていない。

## 2.2. 方言使用と話者の属性・意識

1節でも触れたとおり、和歌山市出身若年層のなかには、「ン」「ヤン」を多く使う話者もいればそれ以外の否定辞を好む話者もいる。こうした違いが何に起因するのかについて考えるために本節では、方言使用に影響を与える要因について論じた先行研究を見ていく。2.2.1で話者の属性、ことばや土地に対する意識から方言使用について考察した先行研究を挙げる。そして2.2.2では、和歌山市民および和歌山県民が、和歌山方言や和歌山県・他地域に対してどのような意識を持っているのかに言及した先行研究について概観する。

### 2.2.1. 話者の属性・意識と方言使用

宮治(1997)では大阪市の高校生を対象として否定辞の使用についてアンケート調査を行った。その際、宮治は「生え抜き度」という指標をもとにインフォーマントを分類し、生え抜きであることと否定辞使用の間に関連性があるかということを分析している。結果として生え抜き度が最も高いグループが伝統的な否定形式を維持し、生え抜き度が最も低いグループが新形式の拡大に関与していることを指摘した。

高橋・西森(1992)では、高知県高知市から高知県高岡郡越知町に、標準語の「カラ」にあたる高知市で生まれた新しい方言形式・接続助詞「キ」がどのようにして持ち込まれているのかということアンケート調査によって明らかにした。結果として、高岡郡越知町から高知市に通う通学者や通勤者が、職場や学校からの影響で「キ」を使用するようになることが明らかになった。そしてそのような人々が家庭内に「キ」を持ち込むことによって高岡郡越知町でも「キ」が広まっているということが明らかにされた。このような結果から生活圏が話者の方言使用に影響を与えていることが窺える。

最後に話者のことばや土地に対する意識という観点から方言使用について論じた荻野(1987)を見ていく。荻野(1987)では、東京・埼玉に住む大阪出身者と大阪に住む大阪出身者に対してアンケート調査を行い、個人の属性や言語意識、使い分け意識などの観点から移住による方言変容について論じている。アンケートの結果、荻野は東京・埼玉と大阪の両方において大阪志向度が強いほど大阪方言が維持されやすい、あるいは話されやすいと結論付けている。なおここでの「大阪志向度」は大阪方言に対する意識に加えて大阪という土地に対する好悪などの意識も含まれており、ことばや土地に対する意識が方言使用に影響

するということが示されている。

以上、話者の属性・意識と方言使用の影響関係についての先行研究を挙げ、生え抜き度や生活圏といった話者の属性や特定の地域への志向性といった意識が方言使用に影響を与えていることを見た。しかし先行研究ではアンケート調査によってその方言使用をたずねており、方言使用意識と属性・意識の影響関係を検討していると言える。そのため、否定辞使用の実態と話者の属性・意識の関連性については明らかになっていない。

### 2.2.2. 和歌山市および和歌山県におけることばや土地に対する意識

全国4万2300人を対象に郷土意識などの調査を行ったNHK放送文化研究所編(1997)では、和歌山県民が「地元のことばが好きではなく、特に残していきたいとは思っていない」という意識を持っていることを示している。また地方なまりが出ることは恥ずかしいことだと回答した人々も多いとされている。地元のことばの好悪に関して言えば、特に和歌山市で好きではないという回答が高かった。またことばに対する意識とは対照的に約8割の回答者が和歌山県への愛着を持っているとしていた。さらに他の都道府県に関する意識としては大阪志向を示していた。

市島(2013)でも同様に大阪志向が示されている。市島が示したのは、和歌山県南部若年層の意識であるが、大阪方言への志向性や大阪府への志向性があるとしていた。

また、和歌山県紀北地方出身で現在も同地在住の10代・20代を対象にアンケート調査を行った森西(2018)では、若年層は和歌山方言を特に恥ずかしいとは思っていないと述べられている。これについて森西は若年層が和歌山方言ではなく大阪方言を使用しているためだとしている。また特に10代では和歌山方言を避ける傾向にあることも分かっており、メディアの影響で標準語を、隣接した地域のことばとして大阪方言をより身近に感じていると森西は主張している。

以上のように和歌山県、特に和歌山市の人々は和歌山方言を好ましく思っていないようであったが、現在ではその意識は薄れてきているようである。特に北部出身の若年層では和歌山方言を恥ずかしいとは思っていないが、その原因は和歌山方言にとって代わって大阪方言や標準語が使用され始めたためだと考えられている。しかし先行研究では方言語彙や否定表現を除く文法項目について検討されており、否定辞については大阪方言や標準語に取って代わられているか不明である。

### 2.3. 問題のありかと本研究の目的

先行研究から、和歌山市では「ン」「ヤン」「ヘン」の3つの方言否定辞が使用されていることが明らかになった。実際には、これに加えて標準語「ナイ」を含む4つの否定辞を持っていると考えられる。しかしこの4つの否定辞については「ヤン」が五段動詞に接続できないこと以外は明らかになっていない部分が多く、それぞれが実際にどのように使用されているのかは未詳である。本研究では、会話録音調査によってこの点を明らかにしたい。

方言使用意識には、生え抜き度や生活圏、特定の地域への志向性といった特定の地域との結びつきや意識が影響を与える(2.2.1)。2.1節で述べたように和歌山市で使われている4

つの否定辞はそれぞれ異なる地域イメージを持っていることから、否定辞使用においても、話し手の属性や志向意識による影響があるものと考えられる。ただし先行研究はアンケート調査によって方言使用意識と志向性の関連を扱ったものが多く、会話データに基づいた方言使用実態と話者の属性や志向性との関連性は明らかになっていない。本研究では、会話録音調査によって明らかにした否定辞使用実態が何に影響を受けているのかということ、生え抜き度や居住歴、生活圏などの〈話者の属性〉と、ことばや土地への志向性などの〈話者の意識〉の両面から分析する。

本研究の目的をまとめると以下の通りである。

- a. 和歌山市出身若年層の否定辞使用実態を明らかにする
- b. 上記 a で示した否定辞使用実態に影響を与えている要因について考察する

### 3. 調査および分析の概要

本節では調査および分析の概要を説明する。3.1 ではインフォーマントの条件および実際に調査を行ったインフォーマントの基本情報を示す。3.2 では調査の概要を説明する。そして 3.3 からは分析の概要に移り、分析方法について説明する。

#### 3.1. インフォーマントの条件

初めに、インフォーマントとする和歌山市出身若年層の条件について説明する。調査にあたっては具体的に以下のような 2 つの条件を設定した。

- (i) 和歌山市出生であり、短くとも 18 歳（高校卒業）までは和歌山市のみに在住
- (ii) 18 歳以上 30 歳未満の男女（高校生を除く）

本研究では和歌山方言を話せることが前提となるため、以上 2 つの条件は、和歌山方言を母方言とし、調査時点においても自由に話すことのできるインフォーマントを選ぶために設定した。(i) において和歌山市居住歴を少なくとも 18 歳までとしたのは、和歌山方言を習得し、かつ日常語として使用する経験をなるべく長く持っていることが望ましいと考えたためである。ただし、進学や就職などで県外に出る人も多いことから、18 歳以降の居住歴は問わないこととした。

条件 (ii) は、インフォーマントのことばの変化を考慮して設定した。和歌山市内では進学や就職に伴い、市内在住であっても県外へ通学・通勤するケースや、高校卒業後に県外に転居するケースが多い。したがって、高校卒業後に県外との接点が増え、また他地域との接触期間が長くなることで、和歌山方言を使用しなくなる可能性もある。そこで、18 歳以上 30 歳未満の若年層であれば行動圏や生活圏の変容からあまり時間がたっていないと考えられることから、これを条件として設定した。

これらの 2 つの条件を満たす人に調査への協力を依頼し、承諾を得たインフォーマントは 15 人（男性 2 人、女性 13 人）である。その基本情報を以下の表 2 に示す。なおインフォーマントの ID は、通し番号・性別（男性 M/女性 F）・各インフォーマントが示した否定辞使用タイプを表すアルファベットから成る。否定辞使用タイプとは、会話データを分析した結果明らかになった否定辞使用傾向の 4 タイプのことで、それぞれ「和歌山市型 (W)」、「関

西方言バリエーション型 (K)」、「標準語バリエーション型 (H)」、「マルチ型 (M)」と称す (詳細は 4 節参照)。

表 2 インフォーマントの基本情報

ID	年齢※	県外居住歴	両親の出身地
01F-W	22	なし	両親ともに和歌山県
02M-W	23	なし	両親ともに和歌山県
03F-W	24	なし	両親ともに和歌山県
04F-W	24	18～22：大阪府、22～現在：京都府	両親ともに和歌山県
05F-W	23	19～現在：京都府	両親ともに和歌山県
06F-W	24	18～現在：熊本県	両親ともに福岡県
07F-W	23	18～現在：東京都	父：和歌山県 母：大阪府
08F-K	24	なし	父：和歌山県 母：兵庫県
09F-K	23	なし	両親ともに和歌山県
10F-K	23	なし	両親ともに和歌山県
11M-H	23	なし	父：神奈川県
12F-H	23	18～現在：大阪府	父：和歌山県 母：大阪府
13F-H	28	18～24：奈良県、24～26：兵庫県、26～現在：東京都	両親ともに和歌山県
14F-M	21	18～現在：大阪府	両親ともに和歌山県
15F-M	23	なし	父：和歌山県 母：鹿児島県

※調査時点のもの

### 3.2. 調査方法

続いて調査方法について説明する。調査としては、すべてのインフォーマントに対して会話録音調査とアンケート調査の2つを、この順で実施した。また必要に応じて追加のインタビュー調査を行った。会話録音調査の概要と会話データの情報については 3.2.1 で説明する。また本研究の会話録音調査では、対面調査とオンライン調査の2つの手法を用いて調査を行ったため、2つの手法で録音したデータを同時に扱う可否についてもここで説明する。そしてアンケート調査と追加のインタビュー調査の概要については 3.2.2 で述べる。

#### 3.2.1. 会話録音調査の概要

会話録音調査の実施期間は 2019 年 7 月から 2021 年 7 月である。調査ではインフォーマントとその親しい友人あるいは家族との会話を録音した。会話相手となる人物については、基本的には 3.1 で挙げた条件に当てはまる人物を選び、そのままインフォーマントとして調査を行った。録音時間は 40 分程度であり、会話のテーマについては話題が尽きた場合には中学や高校の話をして欲しいと説明した組もあった。これは和歌山市に住んでいた頃の話をする事で、県外に転居したインフォーマントが和歌山方言を話しやすくなるのではないかと考えてのことである。

## 和歌山市出身若年層における否定辞使用の多様性とその要因

録音方法には対面と Zoom によるオンラインの 2 種類がある。対面の場合は、和歌山県もしくは大阪府で調査を行った。オンラインの場合はカメラオフで音声のみの調査を行った。録音日をデータ ID として付け、表 3 に会話データの情報を示す。なお、04F-W は 20210116 と 20210221 の二度調査に参加しているが、本稿では両方のデータを合わせて分析を行う。

ここで対面調査とオンライン調査を同時に扱う可否について検討する。オンライン調査では対面調査と比べ、発話数が減るのではないかなどといった懸念があった。以下の表 4 と表 5 は対面調査とオンライン調査における各インフォーマントの発話数を示したものである。文字化を行い、発話数を数えるにあたっては宇佐美（2005）を参考にした。なお 04F-W に関しては 20210116 と 20210221 の両方の発話数の合計を提示する。

表 3 会話データの情報

	データ ID	文字化時間	話者	調査方法
1	20190719	38 分 40 秒	02M-W 11M-H D-01F (同席者・分析対象外)	対面
2	20190828	46 分 33 秒	15F-M 10F-K	対面
3	20190829	42 分 40 秒	03F-W A-01F (会話相手・分析対象外)	対面
4	20190911	41 分 35 秒	09F-K A-02F (会話相手・分析対象外)	対面
5	20210116	43 分 20 秒	12F-H 04F-W	オンライン
6	20210119	47 分 3 秒	06F-W 08F-K	オンライン
7	20210124	40 分 58 秒	05F-W A-03F (会話相手・分析対象外)	オンライン
8	20210221	44 分 27 秒	04F-W 07F-W	オンライン
9	20210318	42 分 12 秒	01F-W A-04F (会話相手・分析対象外)	オンライン
10	20210710	41 分 53 秒	14F-M 13F-H	オンライン

表 4 対面調査の発話数

話者	02M-W	03F-W	09F-K	10F-K	11M-H	15F-M	平均
発話数	420	538	450	369	400	546	453.8

(数字は実数、平均値は小数点第 2 位を四捨五入したもの)

表 5 オンライン調査の発話数

話者	01F-W	04F-W	05F-W	06F-W	07F-W	08F-K	12F-H	13F-H	14F-M	平均
発話数	468	562	277	473	384	578	355	400	473	441.1

(数字は実数、平均値は小数点第 2 位を四捨五入したもの)

表4・表5を見ると、それぞれの平均発話数は対面調査が453.8発話、オンライン調査が441.1発話である。オンライン調査の方が少ないものの、大きく差が開いているとは言い難い。よって本稿では、対面調査のデータとオンライン調査のデータをともに扱うことにする。

### 3.2.2. アンケート調査およびインタビュー調査の概要

会話録音調査の後、2021年9月にGoogleフォームを用いてWebアンケート調査を実施した。アンケートは、《都市部に対するイメージ》、《和歌山市や和歌山方言に対するイメージ》、《普段のことばの使用》、《基本情報》の4つのパートで構成されている。《基本情報》では、居住地や生活圏の影響を考慮して、居住歴や学校・職場の所在地などをたずね、他の項目についてはタイトル通りの内容を質問した。また本研究の分析項目の1つである「生え抜き度」については許可を得たうえで過去の調査で収集した情報を使用し、過去の調査に参加していないインフォーマントについては個別に質問した。

以上のような調査を経て、使用することばやことばに関する経験について気になる点が見られた06F-W、11M-H、12F-H、14F-M、15F-Mについては、2021年11月に通話もしくはZoomによって追加のインタビュー調査を30分前後行った。詳しい内容は個々に異なるが、おおむね自身のことばについてどのようなものだと思うか、またどうしてそのようになったと思うか、普段の生活圏における言語環境などインフォーマントの個別の事情について質問を行った。

### 3.3. 分析方法

続いて分析方法について説明する。3.2.1で述べたような方法で録音した会話データを、宇佐美(2005)をもとに文字に起こし、動詞の否定形を作る否定辞の使用回数を数えた。分析対象となる否定辞については、本動詞接続か補助動詞接続かといった点や主節内か従属節内かといった点は区別せずに数えた。ただしアスペクト表現のシテイル形の否定は分析対象から外す。これは、ほぼすべての用例が「ナイ」で否定されており、バリエーションがないためである。

以上のような方法で文字化を行い、否定辞を取り出した結果、分析対象となったのは「ン」「ヤン」「ヘン」「ナイ」の4つである。これ以外にも「ヒン」「ネー」「ズ」の3つが使用されていた。「ヒン」は日高(1994)において「ヘン」の一種であるとされており、本研究でもこれに則って「ヒン」を「ヘン」として数えた。また「ネー」はナイの長音化であるため「ナイ」として数えた。「ズ」に関しては01F-Wが1回使用したのみだったため、分析対象から除外する。このようにして会話データから取り出した否定辞を、五段動詞接続か五段動詞以外接続かという点で分類し、その後に否定辞ごとに分類した。このような作業をインフォーマント全体と個人のデータに対して行い、否定辞使用状況を整理した。五段動詞接続かどうかという観点で分けたのは、「ヤン」が五段動詞に接続できず、五段動詞かどうかで接続できる否定辞のバリエーションが異なるためである。

#### 4. 会話データの分析結果

ここでは会話録音調査の分析結果を示す。まず4.1で全体の分析を行い、和歌山市出身若年層の否定辞使用傾向を明らかにする。さらに、使用者ごとの傾向を整理し、タイプ分けを試みる。4.2では、4つのタイプのうち五段動詞に「ン」を多用するという点で共通している3つのタイプ（和歌山市型、関西方言バリエーション型、標準語バリエーション型）を取り上げ、残る1つ（マルチ型）については4.3で分析する。最後に4.4で4.1から4.3までの内容をまとめ、和歌山市出身若年層の否定辞使用実態について整理する。

##### 4.1. インフォーマント全体の否定辞使用傾向と4つのタイプ

ここでは4.1.1でインフォーマント全体の否定辞使用傾向を明らかにしたあと、4.1.2で使用者別に見たところ明らかになった4つの否定辞使用タイプについて説明する。

##### 4.1.1. インフォーマント全体の否定辞使用傾向

まずインフォーマント全体の否定辞使用実態について分析を行う。以下の表6は会話データの分析から得られた否定辞と動詞の接続の状況を一覧にしたものである。なお、否定辞使用回数の横に示している（ ）内の数字は可能動詞と接続した回数である。また否定辞使用回数の下に示している（ ）内の数字は各動詞活用型における否定辞総使用回数に対する各否定辞の使用率である。なお「五段動詞+ヤン」の欄は、「ヤン」が五段動詞に接続できないため、斜線にしている。

表6 インフォーマント全体の否定辞使用状況

	ン	ヤン	ヘン	ナイ	合計
五段動詞	254 (78.2%)	/	43 (13.2%)	28 (8.6%)	325
五段動詞以外	26 (11) (14.4%)	84 (35) (46.7%)	33 (18.3%)	37 (8) (20.6%)	180 (54)
合計	280 (11)	84 (35)	76	65 (8)	505 (54)

五段動詞では「ヤン」を除く「ン」「ヘン」「ナイ」の3つのバリエーションがあるが、表6を見ると、78.2%の使用率を示す「ン」との接続が圧倒的に多いことが分かる。続いて五段動詞以外の否定では、「ヤン」を含む4つの否定辞がバリエーション関係にあるが、「ヤン」が最も多く使用されていることが分かる（46.7%）。しかし「五段動詞+ン」と比較すると五段動詞以外における「ヤン」の割合は低く、他の否定辞も比較的使用されやすいようである。和歌山市出身若年層では五段動詞以外の動詞の否定形を作る際にバリエーションが出やすいということが言えるだろう。また「五段動詞以外+ヤン」では可能動詞との接続が最も多く、「ヤン」が可能動詞の否定形を作る際に使用されやすいことが分かる。

以上をまとめると、和歌山市出身若年層は「五段動詞+ン」の傾向を持ち、五段動詞以外では「ヤン」を主に使用しながらも他の否定辞を併用している。また五段動詞以外の中でも可能動詞の否定形を作る際には特に「ヤン」が使われやすいことが分かった。

## 4.1.2. インフォーマント別にみる4つの否定辞使用傾向

前節では、15人のインフォーマントの全体的な否定辞使用傾向について整理した。ここでは、インフォーマントごとの否定辞使用傾向から見えてきた4つのタイプについて述べる。全体としては五段動詞に「ン」が使用されやすいという傾向が指摘できたが、実際には、15人のインフォーマントの中には、この傾向に当てはまるタイプ(13人)とそうでないタイプ(2人)があった。多くが「五段動詞+ン」型であったことになるが、このタイプは、五段動詞以外の動詞にどの否定辞を多用するかによってさらに3つのタイプに分けられた。具体的には、五段動詞以外の動詞との接続において、①「ヤン」を選択するタイプ(7人)、②「ヘン」を選択するタイプ(3人)、③「ナイ」を選択するタイプ(3人)である。一方、「五段動詞+ン」の傾向を持たないタイプは、五段動詞以外の動詞においても複数の否定辞を使用しており、特定の否定辞を多用するというような傾向は読み取れなかった。

2.1の表1でまとめたように、和歌山市で使われている否定辞はそれぞれ個別の地域イメージを持っている。このことを踏まえ、以下では、「和歌山方言らしさ」をもつ「ヤン」を選択するタイプを「和歌山市型」、「大阪府を中心とする近畿中央部らしさ」をもつ「ヘン」を選択するタイプを「関西方言バリエーション型」、「東京都などの首都圏らしさ」をもつ「ナイ」を選択するタイプを「標準語バリエーション型」と称す。特定の否定辞に偏らない使用を示すタイプについては「マルチ型」とする。以下、「五段動詞+ン」の傾向を持つ3つのタイプ(和歌山市型・関西方言バリエーション型・標準語バリエーション型)について4.2で、「五段動詞+ン」の傾向を示さないタイプ(マルチ型)について4.3で詳しくみていく。

## 4.2. 「五段動詞+ン」の傾向を持つ否定辞使用タイプ

ここでは「五段動詞+ン」の傾向を持つ否定辞使用タイプ、すなわち「和歌山市型」、「関西方言バリエーション型」、「標準語バリエーション型」の3つについて見ていく。

## 4.2.1. 和歌山市型の否定辞使用傾向

まず「和歌山市型」のインフォーマントについて分析を行う。このタイプに当てはまるインフォーマントは表7に掲げた7人である。それぞれの否定辞使用を併せて示す(数字は実数)。「五段動詞」の項については、接続できない「ヤン」の列は省略している。また( )

表7 「和歌山市型」の否定辞使用状況

	五段動詞				五段動詞以外				
	ン	ヘン	ナイ	合計	ン	ヤン	ヘン	ナイ	合計
01F-W	29	1	1	31	0	14 (3)	1	1	16 (3)
02M-W	10	6	1	17	0	8 (3)	2	0	10 (3)
03F-W	22	5	1	28	0	2 (1)	0	1	3 (1)
04F-W	21	1	1	24	2 (2)	11 (2)	1	1	15 (4)
05F-W	11	2	1	14	0	5 (2)	0	1	6 (2)
06F-W	19	0	0	19	0	4 (2)	0	2	6 (2)
07F-W	17	0	0	17	3 (3)	6 (1)	4	0	13 (4)

内の数字は可能動詞との接続回数を示している。

表7を見ると、ほぼすべてのインフォーマントが「五段動詞＋ン」と「五段動詞以外＋ヤン」の傾向を示しており、「和歌山市型」といえる<sup>1)</sup>。また可能動詞と「ヤン」の接続が目立ち、可能動詞の否定形を作る際には「ヤン」が使用されていることも分かる。

和歌山型を示したインフォーマントのうち、01F-W、02M-W、03F-Wの3人は和歌山市出身で現在も同地在住であり、これまでに通学や通勤で他府県に出たことがない。また3人の両親はともに和歌山県出身であり、3人は和歌山県生え抜きと言える。このように和歌山市に密着した生活を送っているインフォーマントが見せる使用傾向であることから、「和歌山市型」は和歌山市らしさを強く持った否定辞使用傾向であると言える。

以上のように「和歌山市型」は「五段動詞＋ン」「五段動詞以外＋ヤン」という否定辞使用傾向を示す。「和歌山市型」はバリエーションが出やすい五段動詞以外において和歌山市らしい「ヤン」を使用しており、和歌山県に密着した生活を行っているインフォーマントが見せる傾向である。そのため「和歌山市型」は最も和歌山市らしく、基本的な否定辞使用傾向であると思われる。

#### 4.2.2. 関西方言バリエーション型の否定辞使用傾向

続いて「関西方言バリエーション型」に分類されるインフォーマントの分析を行う。「関西方言バリエーション型」は五段動詞以外において「ン」「ヤン」「ヘン」といった関西方言否定辞をバリエーションとするタイプで、このタイプに含まれるインフォーマントは3人であった。以下の表8は「関西方言バリエーション型」に属する3人の否定辞使用実態を示したものである。

表8を見ると、いずれのインフォーマントも「五段動詞＋ン」の傾向を持っていることが分かる。また五段動詞以外については関西方言の否定辞を主に使用していることが分かる。「和歌山市型」と「関西方言バリエーション型」の違いとしては「ヤン」を主に使用するかどうかである。「関西方言バリエーション型」では、「ヤン」を含めた2つ以上の関西方言否定辞を五段動詞以外におけるバリエーションとして持っている。このことを踏まえると、

表8 「関西方言バリエーション型」の否定辞使用状況

	五段動詞				五段動詞以外				
	ン	ヘン	ナイ	合計	ン	ヤン	ヘン	ナイ	合計
08F-K	23	2	0	25	4 (3)	5 (4)	0	0	9 (7)
09F-K	14	2	2	18	0	7 (6)	3	0	10 (6)
10F-K	17	1	0	18	5 (2)	6 (4)	6	0	28

1) 表7を見ると、五段動詞で「ヘン」が比較的良好に使われているインフォーマント(02M-W、03F-W)や、五段動詞以外の動詞において「ヤン」以外の否定辞も使用しているインフォーマント(03F-W、06F-W、07F-W)がいるが、これは、特定の動詞に特定の否定辞が共起しやすいケースがあり、会話の中でその動詞が繰り返し使用されたことによる(例：ワカレヘン/ワカラヘン(分からない)、アワヘン(会わない)など)。これらを除くと、いずれのインフォーマントも「五段動詞＋ン」「五段動詞以外＋ヤン」の傾向を持っていた。

09F-K は「和歌山市型」のようにも思われるが、「ヤン」と特定の動詞の組み合わせが頻繁に使用された結果として「ヤン」の使用数が突出している。この組み合わせを除くと「ヤン」と「ヘン」の使用は同程度であることから、「関西方言バリエーション型」に分類した。

以上のように「関西方言バリエーション型」では「五段動詞＋ン」の傾向を持ち、五段動詞以外では関西方言否定辞を使用する。また「和歌山市型」と同様に「可能動詞＋ヤン」の組み合わせが多く見られた。

#### 4.2.3. 標準語バリエーション型の否定辞使用傾向

最後に、五段動詞以外の動詞の否定形を作る際に標準語「ナイ」を含むバリエーションを持つ「標準語バリエーション型」について分析を行う。このタイプに当てはまる3人のインフォーマントの否定辞使用状況を表9に示す。

表9を見ると、いずれのインフォーマントも「五段動詞＋ン」の傾向を持っていることが分かる。五段動詞以外については、インフォーマントごとに異なった否定辞のバリエーションを持っているが、「ナイ」を含んでいるという点で共通していることが分かる。このように「標準語バリエーション型」では、和歌山市出身若年層らしい「五段動詞＋ン」という否定辞使用傾向を持つ一方で、五段動詞以外のバリエーションについては「ナイ」を含み、首都圏らしさを示していた。ただし「ナイ」以外の否定辞を使用するか、また使用するのであればどの否定辞を使用するのかという点についてはインフォーマントごとに異なっていた。

表9 「標準語バリエーション型」の否定辞使用状況

	五段動詞				五段動詞以外				
	ン	ヘン	ナイ	合計	ン	ヤン	ヘン	ナイ	合計
11M-H	21	0	9	30	5	2 (2)	1	5 (1)	13 (3)
12F-H	11	0	3	14	0	0	0	13 (6)	13 (6)
13F-K	8	0	2	10	3 (1)	4 (1)	2	2	11 (2)

#### 4.3. マルチ型の否定辞使用傾向

4.2では「五段動詞＋ン」という傾向を持つ一方で、五段動詞以外の動詞の否定形を作る際にバリエーションが見られるインフォーマントを分析した。ここでは「五段動詞＋ン」の偏りを持たない「マルチ型」のインフォーマントについて否定辞使用状況の分析を行う。「マルチ型」とは和歌山市出身若年層に特徴的な「五段動詞＋ン」への偏りを持たず、五段動詞以外においては様々な否定辞を使用するタイプで、表10に掲げる2人が該当した。

表10を見ると「マルチ型」は、五段動詞の場合「ン」「ヘン」を主に使用していることが

表10 「マルチ型」の否定辞使用状況

	五段動詞				五段動詞以外				
	ン	ヘン	ナイ	合計	ン	ヤン	ヘン	ナイ	合計
14F-M	15	11	1	27	4	6 (2)	3	5 (1)	18 (3)
15F-M	16	12	6	34	0	4 (2)	10	5	19 (2)

分かる。また五段動詞以外についてはインフォーマントごとに異なった否定辞使用を示しており共通点は見当たらなかったが、五段動詞において「ン」と同数程度「ヘン」を使用しているという点は注目すべきであると考えられる。というのも、「五段動詞＋ン」という、他のインフォーマントに共通してみられた傾向がこのタイプにだけ当てはまらないからである。「五段動詞＋ン」という組み合わせは、和歌山市方言らしさを表す大きな特徴と考えられるが、この2人のインフォーマントは「ン」のほかに「ヘン」も併用しているのである。

このように「マルチ型」では五段動詞に「ン」だけでなく「ヘン」も併用するという点が大きな特徴である。

#### 4.4. 和歌山市出身若年層における否定辞使用実態

ここでは前節までに明らかにした4つの否定辞使用タイプについてまとめる。ここまで否定辞使用傾向をもとに「和歌山市型」、「関西方言バリエーション型」、「標準語バリエーション型」、「マルチ型」という4つのタイプに分けた。このような4つのタイプについてまとめたものが以下の表11である。

表11 否定辞使用の4タイプ

タイプ名	否定辞使用傾向	
	五段動詞	五段動詞以外
和歌山市型	「ン」	「ヤン」
関西方言バリエーション型		「ン」「ヤン」「ヘン」
標準語バリエーション型		すべての否定辞（「ナイ」は共通）
マルチ型	「ン」「ヘン」（「ナイ」）	すべての否定辞

表11を見ると、「マルチ型」以外は、和歌山市出身若年層らしい「五段動詞＋ン」という使用傾向を持っていることが分かる。その一方で、タイプごとに違いが見られたのが五段動詞以外の場合である。「和歌山市型」では和歌山市を中心とする和歌山県北部に特徴的な「ヤン」を使用しているが、「関西方言バリエーション型」ではこれに近畿周辺部らしさを持つ「ン」と近畿中央部らしさを持つ「ヘン」が加わっており、全体としては関西方言否定辞をバリエーションとして使用していた。さらに「標準語バリエーション型」になると「ナイ」を共通して持ち、首都圏らしさや標準語らしさを示していた。

このように「和歌山市型」「関西方言バリエーション型」「標準語バリエーション型」は、和歌山市出身若年層らしい「五段動詞＋ン」を持つ一方で、五段動詞以外の動詞の否定形を作る際にはタイプごとに違いが見られる。その一方で、そもそも「五段動詞＋ン」に縛られず、まったく異なる否定辞使用傾向を見せるのが「マルチ型」である。「マルチ型」では五段動詞の場合、「ン」だけでなく「ヘン」も同数程度使用しており、また、五段動詞以外の場合にはすべての否定辞がバリエーションの対象となる。このように様々な否定辞を使用しているために、否定辞使用傾向から特定の土地をイメージすることが難しい。

## 5. 否定辞使用タイプとアンケートの比較

本節では 4 節の結果とアンケート調査の結果を比較し、それぞれの分析項目と否定辞使用実態との関係について検討する。ここではアンケートの内容をインフォーマントの属性項目と意識項目に大別し、それぞれ 5.1 と 5.2 で分析を行う。結論を先取りすると、分析の結果、否定辞使用実態は意識項目よりも属性項目に影響を受けやすいことが分かった。

## 5.1. インフォーマントの属性に関する分析

まずはインフォーマントの属性項目について分析を行う。属性項目には「①生え抜き度」、「②地元密着度」の 2 つがある。これらの 2 つの項目に対して比較しやすいように数値化を行った。「①生え抜き度」については高木 (2006) の PRI (Parent's Regionality Index: 両親についての RI (生え抜き度)) を参考に数値化した。両親の出身地を以下の基準で数値化し、父親母親それぞれの数値を足し合わせたものを、本研究での生え抜き度とする。

## ① 「生え抜き度」の数値化

- a. 和歌山県内=0
- b. 和歌山県と同一地方 (近畿地方) の他府県=1
- c. 和歌山県とは異なる地方の都道府県=2

生え抜き度が最も高いのは両親の出身地がともに和歌山県のインフォーマントで生え抜き度は 0 となる。また生え抜き度が最も低いインフォーマントは両親の出身地がともに近畿地方以外の都道府県である場合で、生え抜き度は 4 となる。

次に「②地元密着度」については居住歴・生活圏と県外在住歴の有無をもとに以下の方法で数値化を行った。

## ② 「地元密着度」の数値化

- a. 県外在住歴を持っていれば 1 点、持っていなければ 0 点を加算する
- b. 以下の基準により居住歴のある地域・地方を点数化し、②a に加算する
  - b-1. 和歌山市内=0 点
  - b-2. 和歌山県と同一地方 (近畿地方) の他府県=1 点
  - b-3. 和歌山県とは異なる地方の都道府県=2 点

例えば 13F-H の場合、県外在住歴があり (②a: 1 点)、近畿地方と関東地方に居住歴がある (②b: 1+2=3 点) ため、「地元密着度」は合計 4 点となる。以上のようにして 2 つの項目の数値化を行った。どちらも数値が低いほど和歌山市に密着していることになる。このような数値化の結果を否定辞使用タイプとクロス集計したものが以下の表 12、表 13 である。

表 12 「生え抜き度」と否定辞使用タイプ

生え抜き度	W型	K型	H型	M型	合計
0点	5	2	1	1	9
1点	1	1	1	-	3
2点	-	-	1	1	2
3点	-	-	-	-	-
4点	1	-	-	-	1

表 13 「地元密着度」と否定辞使用タイプ

地元密着度	W型	K型	H型	M型	合計
0点	3	1	1	-	5
1点	-	2	-	-	2
2点	2	-	1	1	4
3点	2	-	-	-	2
4点	-	-	1	-	1

表 14 「生え抜き度」と「地元密着度」のクロス集計

		生え抜き度				合計 (人)
		0点	1点	2点	4点	
地元密着度	0点	01F-W、02M-W、03F-W	08F-K	11M-H	-	5
	1点	09F-K、10F-K	-	15F-M	-	3
	2点	04 F-W、05F-W、14F-M	12F-H	-	-	4
	3点	-	07F-W	-	06F-W	2
	4点	13F-H	-	-	-	1
合計 (人)		9	3	2	1	15

W：和歌山市型、K：関西方言バリエーション型、H：標準語バリエーション型、M：マルチ型

次に、これらの結果をクロスさせた個人ごとの結果を表 14 として示す（「生え抜き度」3点 は該当者なしのため表からは除いた）。表 14 から、「生え抜き度」が高い人々は「地元密着度」に関わらず「和歌山市型」を示していることが分かる。つまり他地域との接触が多い場合でも、地元の友人同士の会話では和歌山方言らしい否定辞使用をする人々が多いようである。しかし生え抜き度が高い一方で、「関西方言バリエーション型」を示す 09F-K、10F-K のようなインフォーマントもいる。この 2 人については通学などで関西他府県との接触があるが、これらの地域からの影響が地元の友人との会話にも現れているようである。そのため、09F-K と 10F-K については土地への志向性の影響も考えられるが、その点については 5.2 で詳しく論じる。また「生え抜き度」、「地元密着度」がともに低い一方で「和歌山市型」を示している 06F-W と 07F-W についても属性ではない部分に影響を受けているようである。この 2 人についても 5.2 で詳しく見ていく。最後に「標準語型」や「マルチ型」については「生え抜き度」と「地元密着度」のいずれかが 2 点以上であると現れやすいようである。

このように属性項目と否定辞使用タイプの間では主に「生え抜き度」が影響を与えていることが分かり、「生え抜き度」が高いほど「和歌山市型」になりやすいことが明らかになった。また「生え抜き度」あるいは「地元密着度」のいずれかが 2 点以上になると「標準語型」や「マルチ型」になりやすいことが分かり、和歌山市から距離を置くほど和歌山方言らしさから離れていく。

## 5.2. インフォーマントの意識に関する分析

続いて、インフォーマントの意識項目と否定辞使用タイプの関連性について分析を行う。意識項目には「③和歌山県外への意識」、「④都市部への憧れ・好意的な印象」、「⑤和歌山市への愛着」、「⑥和歌山方言の県外使用への抵抗」の 4 つの項目がある。属性項目と同様にこれら 4 つの項目も数値化を行い、1 つの表にまとめて分析する。

まず「③和歌山県外への意識」は以下の基準に基づいて「a. 大学進学時」、「b. 大学院進学時」、「c. 就職活動時」の県外への意識を点数化し、その合計を求める。また大学院進学や就職活動の際の県外意識については、そのインフォーマントが既に県外在住であったとしても和歌山市を基準として県外・県内を判断した。例えば、大学進学で大阪府に県外進学し、転居したインフォーマントが就職活動時に大阪府での就職を希望していた場合、和歌山市

外であるため「県外就職・県外転居」となる。

③ 「県外への意識」の数値化

- a. 「県外進学（就職）・県外転居」=2点
- b. 「県外進学（就職）・県内在住」=1点
- c. 「県内進学（就職）」=-2点
- d. 「特になし」=0点

「④-1 都市部への憧れ」と「④-2 都市部への好意的な印象」については別々の質問項目であるが、アンケートの結果に似通っている部分もあるため、同時に扱うこととする。憧れや好意的な印象については、どこに対する意識かに関わらず憧れや好意的な印象があれば1点、無ければ0点とした。「高校在学時」、「大学在学時」、「大学院在学時」、「就職（活動）時」という4つ期間の憧れの有無と好意的な印象の有無を数値化し、合計したものを「都市部への憧れ・好意的な印象」を数値化したものとする。

「⑤和歌山市への愛着」についてはアンケート調査で「強くある」「やや強くある」「ある」「あまりない」「まったくない」の5段階で回答してもらった。そこで「強くある」を1、「やや強くある」を2、「ある」を3、「あまりない」を4、「まったくない」を5として5段階でその愛着を数値化する。

最後に「⑥和歌山方言の県外使用への抵抗」については、0で「抵抗がない」を、1で「抵抗がある」を表している。

このようにして4つの項目の数値化を行った結果をまとめたものが表15である。5.1と同様にいずれの項目も数値が低いほど和歌山市および和歌山県へ向いているということになる。表15を見ると、意識項目では特定の否定辞使用タイプが一か所に集まっていることはなく、否定辞使用タイプとの関連性はあまり見られない。5.1では生え抜き度が高い一方

表15 否定辞使用タイプと意識項目の比較結果

③和歌山県外への意識		④都市部への憧れ・好意的な印象		⑤和歌山市への愛着		⑥和歌山方言の県外使用への抵抗	
01F-W	-4	01F-W	0	01F-W	1	01F-W	0
10F-K	-2	04F-W	0	03F-W	1	05F-W	0
03F-W	-1	06F-W	0	13F-H	1	02M-W	0
14F-M	0	08F-K	0	14F-M	1	03F-W	0
02M-W	0	11M-H	0	04F-W	2	08F-K	0
08F-K	1	03F-W	1	05F-W	2	10F-K	0
06F-W	2	10F-K	1	09F-K	2	11M-H	0
11M-H	2	13F-H	1	12F-H	2	12F-H	0
15F-M	2	07F-W	2	15F-M	2	13F-H	0
04F-W	4	05F-W	3	06F-W	3	14F-M	0
05F-W	4	09F-K	3	07F-W	3	15F-M	0
07F-W	4	14F-M	3	10F-K	3	09F-K	近畿地方のみ0
09F-K	4	15F-M	3	02M-W	4	04F-W	1
12F-H	4	02M-W	4	08F-K	4	06F-W	1
13F-H	4	12F-H	4	11M-H	5	07F-W	1

で「関西方言バリエーション型」を示した 09F-K と 10F-K については土地への志向性からの影響が考えられるとした。しかし表 15 を見ると、09F-K は和歌山市と県外の両方に、10F-K はどちらかと言えば和歌山県内に志向性があり、土地への志向性との関連性もあまりないようである。ただし「⑥和歌山方言の県外使用への抵抗」を見ると 2 人はともに近畿地方では抵抗がないとしている。そのため、普段の生活圏内では和歌山方言、関西方言関係なく使用しており、それが地元の友人との会話にも持ち込まれている可能性がある。この「⑥和歌山方言の県外使用への抵抗」については 5.1 でも触れた、「①生え抜き度」、「②地元密着度」がともに低い「和歌山市型」を示した 06F-W と 07F-W が「県外使用への抵抗がある」として一か所に集まっている。2 人はそれぞれ熊本県と東京都在住であり、和歌山方言とは異なることばを使用する地域に住んでいる。そのため、異なることばである和歌山方言を現住地で使用することに抵抗を感じ、周囲の人々が話していることばに合わせている。しかし地元の友人に対しては和歌山方言を使用するため、「和歌山市型」になっていると思われる。同じく「抵抗がある」とした 04F-W は 5.1 の結果から「①生え抜き度」の影響が強いと思われるが、04F-K も京都府在住であり、ことばの違いから県外使用に抵抗を感じると考えられる。このことから、和歌山方言と異なることばを使用する地域に転居したインフォーマントの多くは、和歌山方言の県外使用に抵抗を感じやすいが、地元の友人との間では「和歌山市型」になりやすいと言える。しかし大阪府在住の 12F-H、14F-M、東京都在住の 13F-H は和歌山方言とは異なることばを使用する地域に住みながら県外使用に抵抗を感じていない。これについては 3 人が過去の言語環境や経験により和歌山市出身若年層らしい否定辞使用をしていないためであると思われる。

このように意識項目については「⑥和歌山方言の県外使用に対する抵抗」から一定の影響は感じられるものの、5.1 で見た属性項目とは異なり、否定辞使用タイプとあまり影響関係がないことが明らかになった。

## 6. 和歌山市出身若年層の否定辞使用実態に影響を与える要因

ここでは和歌山市出身若年層の否定辞使用実態に影響を与えている要因についてまとめ、考察していく。6.1 では 6 項目の結果を比較して最も広い範囲に影響を与えている要因を明らかにする。6.2 では五段動詞以外でバリエーションが出る理由について先行研究やインフォーマントの話から検討する。

### 6.1. 否定辞使用実態に影響を与える要因

ここでは 5 節で明らかになった各項目と否定辞使用タイプの関連性について、すべてを一括して比較し、最も否定辞使用タイプに影響を与えている要因について検討する。そしてそれら使用タイプと 6 つの項目の影響関係についてのまとめを以下の表 16 で示す。

アンケート結果を見ると、インフォーマントの意識よりも属性の方が否定辞使用実態に影響していることが分かる。具体的には属性項目から「①生え抜き度」、「②地元密着度」、意識項目から「⑥和歌山方言の県外使用への抵抗」が影響を与えていた。このうち最も影響を与えているのは「①生え抜き度」である。5.1 でも見たように「②地元密着度」では、そ

表 16 否定辞使用タイプと6つの項目の関連性

インフォーマントの属性に関する2項目	
①生え抜き度	・生え抜き度が高いほど「和歌山市型」になりやすい ・「生え抜き度」と「地元密着度」のいずれかが高いと「標準語型」あるいは「マルチ型」になりやすい
②地元密着度	・「地元密着度」が1点の場合（近畿他府県に生活圏を持つ場合）、 「関西方言バリエーション型」になりやすい ・「生え抜き度」と「地元密着度」のいずれかが高いと「標準語型」 あるいは「マルチ型」になりやすい
インフォーマントの意識に関する4項目	
③県外への意識	(特に影響関係はない)
④都市部への憧れ・好意的な印象	(特に影響関係はない)
⑤和歌山市への愛着	(特に影響関係はない)
⑥和歌山方言の県外使用への抵抗	・和歌山市から和歌山方言とはかけ離れたことばを使用する地域 に転居したインフォーマントが抵抗を感じやすい ・県外ではその地域のことばを、地元の友人の間では和歌山方言 を使用し、使い分けられていると考えられる

の強さと否定辞使用タイプに強い相関関係は見いだせなかった。しかし「①生え抜き度」は、「②地元密着度」に関係なく、その数値が高いほど「和歌山市型」になりやすいことが明らかになった。そのため、「①生え抜き度」は「②地元密着度」よりも強い影響力を持っていると思われる。また「⑥和歌山方言の県外使用への抵抗」については和歌山方言とは異なることばを使用する地域に住むインフォーマントの一部のみに影響しているため、「①生え抜き度」よりも影響度は低い。

## 6.2. 五段動詞以外にバリエーションが現れやすい理由

最後に五段動詞以外の動詞の否定形を作る際にバリエーションが現れやすい理由について検討する。4.1.1 で示したように、和歌山市出身若年層の間では「五段動詞以外+ヤン」が基本的な使用傾向である。しかし実際には「ヤン」以外の否定辞も使用されており、「五段動詞以外+ヤン」はそれほど安定しているわけではない。4.1 で示した表 6 でも、「五段動詞+ン」の使用率が80%に迫る一方で、「五段動詞以外+ヤン」の使用は50%にも届いていない。また「五段動詞以外+ヤン」の中でも「可能動詞+ヤン」の使用が多く、可能動詞の否定形を作る際には「ヤン」が使用されやすい。そこで、可能動詞を除く五段動詞以外における否定辞の使用状況を表 17 としてまとめた。表では一段動詞とカ行変格活用動詞・サ行変格活用動詞に分けて示してある。( ) 内の数字は各動詞活用型における否定辞の総使用回数に対する各否定辞の使用率である。

近畿地方の方言形成について論じた日高 (2014) では、「ヤン」が変格活用動詞に対して使用されにくいと述べられている。このことを踏まえて表 17 を見ると一段動詞に比べてカ変・サ変では「ヤン」に偏っていないことが分かる。このように変格活用動詞に対して「ヤン」が使われにくいことが、五段動詞以外にバリエーションが出やすい要因の一つである。

続いて一段動詞に限って、その否定辞の接続状況を以下の表 18 で見る。日高 (2014) で

和歌山市出身若年層における否定辞使用の多様性とその要因

表 17 五段動詞以外（可能動詞を除く）の否定辞接続状況

	ン	ヤン	ヘン	ナイ	合計
一段動詞	7 (8.2%)	35 (41.2%)	22 (25.9%)	21 (24.7%)	85
カ変・サ変	8 (19.5%)	14 (34.1%)	11 (26.8%)	8 (19.5%)	41
五段動詞以外 (合計)	15 (11.9%)	49 (38.9%)	33 (26.2%)	29 (23.0%)	126

表 18 一段動詞拍数別接続回数（可能動詞を除く）

	ン	ヤン	ヘン	ナイ	合計
2 拍	0 (0.0%)	<b>9</b> <b>(45.0%)</b>	0 (0.0%)	11 (55.0%)	20
3 拍以上	7 (10.8%)	<b>26</b> <b>(40.0%)</b>	22 (33.8%)	10 (15.4%)	65

は2拍動詞で「ヤン」が使用されやすく、3拍以上になると動詞にもよるが「ヤン」が現れにくくなっていることが示されている。そのため、表18では2拍の動詞と3拍以上の一段動詞に分けて示す。( )内の数字は2拍動詞と3拍以上の動詞それぞれにおける否定辞の総使用回数に対する各否定辞の使用率である。表18を見ると、わずかな差ではあるが、2拍動詞の方が「ヤン」の使用率が高い。また2拍動詞におけるバリエーションが「ヤン」「ナイ」であるのに対して3拍以上の動詞では和歌山市内で使用されている4種類の否定辞すべてが使用されている。これらのことから3拍以上の一段動詞においては「ヤン」との結びつきはそれほど強いものではないと思われる。

また使用地域の面からみると「ヤン」の使用地域は狭い。鳥谷・岸江(2014)や村中(2014)では、大阪府や奈良県の若年層に「ヤン」の使用が現れ始めていると述べられている。しかし65歳以上を対象に調査を行った岸江他編(2017)を確認すると「ヤン」は和歌山県や三重県でしか使用されていない。このように現段階では大阪府や奈良県の若年層に「ヤン」の使用が出現し始めているが、それ以外では和歌山県や三重県でしか使用されていない。「ヤン」は年代的にも地理的にも限られた範囲でしか使用されていないことが分かる。

さらに調査の中で文末の「やん」と重なると聞こえが悪いという話が聞かれた。例えば次のような文である(筆者の作例)。

(5) そんなことイエヤンやん。(そんなこと言えないじゃん。)

また「和歌山の人にはヤンヤン言いがちだと言われる」という話も聞かれ、「ヤン」と「やん」の重なりを意識していると思われる。

以上のように否定辞「ヤン」は五段動詞に接続できないことも含めて汎用性が低いことが明らかになった。また主な使用地域が狭いことや文末の「やん」と重なると聞こえが悪かったり他地域の人に指摘されたりすることも分かった。このように使用上の障害が多く存在するため、「ヤン」は他の否定辞に取って代わられやすいと考えられる。

## 7. まとめと今後の課題

本研究では、和歌山市出身若年層の否定辞使用実態を会話データから明らかにし、そこに影響を与える要因について論じてきた。本論文で明らかにしたことは次の通りである。

### 【a. 和歌山市出身若年層の否定辞使用実態を明らかにする】

- ・和歌山市出身若年層は、「五段動詞+ン」「五段動詞以外+ヤン」を基本の形として持つ一方で、詳細には「和歌山市型」「関西方言バリエーション型」「標準語バリエーション型」「マルチ型」の4つのタイプが存在する(4.4, 表11)。

### 【b. aで示した否定辞使用実態に影響を与えている要因について考察する】

- ・意識項目ではなく属性項目が主に否定辞使用実態に影響を与えていた(6.1, 表16)。
- ・「生え抜き度」が最も広い範囲に影響力を持ち、「地元密着度」「和歌山方言の県外使用への抵抗」は部分的な影響に留まった。

### 【五段動詞以外にバリエーションが出やすい理由】

- ・汎用性の低さや使用地域の狭さ、文末の「やん」と重なった際の聞こえの悪さといった使用上の制約が「ヤン」には多く、他の否定辞に代われやすい。

本研究では以上のことを明らかにする一方で、地域に関する属性や意識からの分析に終始し、土地以外に対する意識や他の要因については検討することが出来なかった。そのため、より多くの意識項目やその他の要因について調査していく必要があるだろう。

## 【参考文献】

- 市島佑起子(2013)「地域のことばと意識—紀伊半島沿岸地域における言語意識から—」岸江信介・太田有多子・中井精一・鳥谷善史編『都市と周縁のことば 紀伊半島沿岸グロットグラム』pp.303-333, 和泉書院。
- 宇佐美まゆみ(2005)「改訂版:基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/mojika.pdf> (最終閲覧日2021年10月18日)。
- 榎垣実(1932)「「へん」と「やん」—和歌山市方言の否定の助動詞—」『国語研究』4-7, 国語学研究会(再録:井上史雄他編1996『日本列島方言叢書⑭ 近畿方言考② 三重県・和歌山県』pp.193-207, ゆまに書房)。
- NHK放送文化研究所編(1997)『現代の県民気質—全国県民意識調査—』NHK出版。
- 荻野綱男(1987)「大阪方言話者の移住による言語変容」『関西方言の動態に関する社会言語学的研究』科研費報告書(再録:徳川宗賢・真田信治編1995『関西方言の社会言語学』世界思想社)。
- 岸江信介(2014)「近畿・四国地方における言語変化—動詞否定形式を例として—」小林隆編『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論—』pp.227-244, ひつじ書房。
- 岸江信介・清水勇吉・峪口有香子・塩川奈々美編(2017)『近畿言語地図』徳島大学日本語学研究室。
- 高木千恵(2006)『関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相』(『阪大日本語研究』別冊2) 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座。

- 高橋顕志・西森千津（1992）「高知県高岡郡越知町への接続助詞「キ」の侵入—高知市内への通学生・通勤者の役割—」『国語学』168, pp.110-97, 日本語学会.
- 鳥谷善史・岸江信介（2014）「関西若年層の否定辞「～ヤン」の使用拡大とその要因について」『日本方言研究会研究発表会発表原稿集』98, pp.33-40, 日本方言研究会.
- 日高水穂（1994）「近畿地方の動詞の否定形」『方言文法1』pp.55-77, GAJ 研究会.
- 日高水穂（2014）「近畿地方の方言形成のダイナミズム—寄せては返す「波」の伝播—」小林隆編『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論—』pp.245-264, ひつじ書房.
- 松宮忍（1992）「関西方言打消し表現の動態—助動詞「ヘン」を中心として—」『地域言語』4, pp.50-62, 天理・地域言語研究会.
- 宮治弘明（1997）「都市方言研究への一提言」『梅花女子大学文学部紀要（日本語・日本文学編）』31, p.1-12, 梅花女子大学文学部.
- 村中淑子（2014）「大阪・奈良の方言における否定辞について—世代差を中心に—」『人間文化研究』1, pp.3-27, 桃山学院大学総合研究所.
- 森西カンナ（2018）「和歌山県紀北地方にみられる伝統的な方言使用の減少について—若年層における大阪方言の影響の拡大—」『言語の研究』4, pp.21-56, 首都大学東京言語研究会.
- 山本俊治（1981）「ン・ヘンをめぐって—大阪方言における否定法—」『藤原与一先生古希記念論集 方言叢書Ⅰ方言研究の推進』三省堂（再録：井上史雄他編 1996『日本列島方言叢書⑩ 近畿方言考④ 大阪府・奈良県』pp.386-372, ゆまに書房）.

---

やまぐち みお（大阪大学大学院修了生）